

生徒諸君へ、保護者の皆様へ

令和元年（2019年）12月26日

「可能性の塊たちに」

須坂高等学校長 本多健一

平生より保護者の皆様には本校の教育活動につきまして温かいご理解と惜しみないご協力を賜り、衷心より感謝申し上げます。また、本年度は北信越高 P 連が長野で開催され、盛会のうちに無事終了したことをご報告申し上げますとともに、ご多忙の中ご尽力いただきました西澤会長様、寺澤、児玉両副会長様はじめ役員の皆様方に深く御礼申し上げます。

さて、お陰様で、本校は、今年度初めに、「未来の学校」（県下6校）に指定され「信州グローバル・ハイスクール」研究校としてスタートを切ることができました。須坂高校生のポテンシャルの高さとここ数年で実施してきた多様な教育活動が認められた結果です。スローガンは「GoGaKu 力（北信五岳の見える学舎で学ぶ五学＝「吾学」「郷学」「語学」「互学」「悟学」によって身に着けた力）を地域や社会への貢献に生かしながら、高い志をもって国際社会をたくましく生き抜く人間力を養う」というものです。「良質な刺激によってしなやかな知性を身に着け、新時代をたくましく生きていく生徒になってほしい、そして幸せになってほしい」という願いが込められています。そして、このスローガンのずっと先には、知識と知恵で地域貢献する「大学のない町の大学のような学校」（SAH＝スーパー・アカデミック・ハイスクール）になるという高邁なビジョンがあります。もともと地域にとって大学のような存在であり、誇りであった本校でしたが、その方向性をより明確にしました。そうした理由は、語れば長くなりますので、ここでは、須坂高校の伝統のみならず、地域の盛衰に係ることであり、何と云っても、可能性の塊である須坂高校生の成長のためであると簡単に申し上げておきましょう。

さて、部活動（特に運動部およびそれに匹敵するハードな文化部）に関する私の提案については、保護者の皆様にご心配をおかけしているところです。保護者の皆様や先生方を議論の中に巻き込まなかったのは、学習指導要領に「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動」と謳われていますので、生徒会活動も含めて高校生活の当事者である生徒諸君に自分事としてしっかり考えてほしかったからです。「任せてぶーたれる人間」ではなく「引き受けて深く考える人間」になってほしい、個人の欲求と公共性の両立を念頭に議論を重ね、持続可能なよりよい社会を作ろうとするシティズンシップを養ってほしいという願いを込めてのことですので、どうぞご理解ください。（学習指導要領には「（部活動は）学校教育の一環として、教育課程（授業）との関連が図られるよう留意すること」とあり、部活に対する教師側の在り方も示されていることも付け加えておきましょう。）

さて、ご存知の通り 1 学期の終業式に校長から「部活動は 2 年で引退したらどうか」という提案をしました。実は、その前置きでとても大事な話をしていますが、「2 年で引退」という強烈な言葉だけが保護者の皆様に伝わっていると感じることもありましたので、この機会に、以下、1 学期終業式に話した内容、その後の様子とより詳しい説明、更には 2 学期終業式に語った内容もお伝えしようと思います。

<令和元年（2019年）7月26日（金）1学期終業式にて>

○高校野球に関するニュースを見ました。佐々木投手が登板できず、決勝で負けて甲子園に行けなかったその監督の采配について、自分が監督だったらどうか？考えてみても答えはだせませんでした。皆さんが監督だったらどうしますか？世界のアスリートのコーチたちは、選手の未来を考えて無理させないのがあたり前。日本は、どちらかというところ中学、高校のうちに結果を出したがる。様々な考え方の集まりが社会であるし、社会の縮図である学校も多様な考え方に満ちている。そのなかで、可能性の塊である生徒の将来を第一に据えて、批判覚悟で信念をもって結論を出した監督の姿勢は立派だと思いました。

○その一方で、ある高校でまたしても運動部顧問による体罰がありました。学習指導要領には一言でいえば言えば、「部活動は生徒のもの」と言っています。体罰を起こすのは自分が輝きたい先生です。「おれの言うことを聞け」「おれの指示命令に従え」と。

○今年から、3学期制にしました。一度立ち止まって振り返り、もう一度未来を見る節目を増やしました。これを機に自分を客観的に見つめなおしてみてください。

○私から告知を一つ。

今、自習室を新しく考えているところ。その自習室に名前をつけてほしい。「自習室ネーミングコンテスト」を実施します。投票箱は校長室前のソファのところに、投票用紙とともに置いておきます。投票資格は、本校の生徒と先生。賞は、その自習室の名前のプレートが部屋に掲げるとともに、そのプレートの裏には命名者の名前を入れて残し、2000円の図書券を副賞として贈呈することです。

○さて、今の2、3年生には、4月の始業式の時に、「新しく入ってくる後輩に、カッコいい姿を見せてほしい」と言いました。カッコいいの定義はいろいろあると思いますが、「やるべきことをたとえ一人でも責任とプライドをもって実行するぶれない姿」だと私は定義します。1年生は2、3年生の姿をどう思ったかでしょうか？本日、配布されたPTA新聞に「背中」という1年生が書いた文章がありました。先輩の姿がカッコよかったという文章です。私も、3年生は、カッコよかったと思います。生徒会執行部、りん祭、龍執行とか、野球部水泳部の3年生とかね。野球部、水泳部の3年をあげて挙げたのは、結果を出したことをほめているのではなく、高みを目指しながら、ちゃんと上位目標を意識して勉強を大切にしていたからです。生徒会が、打ち立てた素晴らしいスローガン「凡事徹底」をまさに実践した姿でした。

○学校は、社会の縮図です。多様な価値観、文化、言語をもった一人一人の集合体が社会で、その社会をよりよくするにはどうすべきか、その中でよりよく自分が生きていくにはどうすればいいかを、トライして、失敗して、またトライして、探究するところです。そして、自分らしい生き方を見つけていくところです。例えば、学校で理不尽なことがあったら、それに堂々と立ち向かうのもその人の生き方だし、上手にかわしていくのも立派な方法です。どういう生き方が自分に合っているのかを見つける場でもあります。

○さて、君たちが所属している部活という社会は、どうでしょう。部活もいろいろな考え方のある人たちが集まっている社会です。アンケートの記述を見ると「もっとやりたい。どうして、部活の時間を短くしたのですか？」という意見の一方で、「土日がない。Offにするように徹底してほしい。」「スマホのせいじゃない。部活のせいで勉強も何もまったくできない。」という正反対の意見があります。「家の経済的な理由で、合宿も遠征も減らしてほしい。」という生徒もいます。そういう様々な考え方や背景をもった人たちが、大好

きなことをやりたいという理由で集まっている。そういう部活をみんなが上位目標を達成できる持続可能な住みやすい場にするにはどうしたらよいのかを考えて実行することが大事です。勝利を目指す、せっかくやるなら全国大会を目指すという高い志を持ちつつも、誰もが続けられるバランスのとれた部にするを考えなければなりません。

○考える際にもっとも大事な観点は、「個人の自由と公共性の両立」です。「もっとやりたい。県で優勝してインターハイに行きたい」「そうだけど、自分は大学へ行くのだから、勉強に割く時間とお金と体力は確保したい」など、それぞれ個人の欲望、欲求があります。そういう個人の自由と「どういう部活でありたいか」という全員が納得する理想の形、みんなが上位目標を目指しつつ、しっかり持続できるという、その集団が持つ「公共性」との折り合いをどうつけるかという観点で話しあうべきです。

○もう一つ、大事なことは、「好きなことをやらせてもらっている」という認識をしっかり持つことです。何か、部活をやっている、部活という大変なことをやっているというような勘違いをしないことです。仕事もしないで、大好きなゴルフばかりやっている、休みの日も、家のことは一切しない、地域の活動も一切しない、俺はゴルフをやりたいだけやると言っているような人はほとんどいません。自分が所属しているところに対する責任を果たし、自分のやるべきことをやりながら、許された時間の中で好きなことに夢中になるというのが、豊かな人生の在り方です。

先ほど、学校は社会の縮図だと言いました。高校生である以上、しかも、ほとんどが大学に行きたいと思っていて、親もそれを望んでいる以上、高い志をもって勉強することが君たちの責務です。また、自分を応援してくれている親の手伝いだって、大事なことです。生徒会の一員である以上、生徒会に関心を持ち、協力するのが会員の責務です。それらをすべて後回しにして、体力、時間、お金の殆どを部活に費やしているとすれば、家庭や仕事を顧みずゴルフばかりやっている道楽おやじと同じです。

○また、自分のことばかりでなく、かかわっている大人のことを考えるべきです。土日も休まず自分の時間を割いて、心身の休息もなく月曜日から仕事をする状況に親や先生を追いやっていいのでしょうか。文科省の調査によれば、親や先生が部活にかかわる時間は2009年度比で2倍以上になっています。大人たちのことも君たちは考えなければなりません。なぜならば、皆さんは、高校生のうちに選挙権を手にしたいっばしの社会人になるからです。いっばしの社会人は個人の欲望だけを言うてはいられないのです。個人の自由と公共性の両立をしっかりと考える練習、よりよい社会を作る練習を高校のうちにおこななければなりません。それをやって、初めて意味のある部活動・生徒会活動、そして、それらすべてを含んだ学校という社会になるのです。

○君たちは、大会やコンクールがあるから、基礎トレーニングもすれば、練習もするし、練習試合もするでしょう。大学入試という個人戦・全国大会に向けてはどうでしょうか。学力という基礎体力をコツコツと身に着け、定期テストという練習もすれば、模試という練習試合もするのが当たり前でしょう。部活ではやるが、大学入試に向けては何もしないという態度は、自由ではなく放縦です。

○いよいよ本題です。大学入試が変わります。来年の6月14日には、英語の4技能試験(G-TEC)が実施されます。それまでに、学力を着実につけておく必要がありますし、推薦入試を狙う者は、確かな学力に加え多様な活動によって経験値を高めておく必要があります。4、5、6月はほとんど勉強ができないというこれまでの部活動の在り方やりんどう祭の在り方では、まったく、大学入試という全国大会個人戦に須坂高校生は勝てません。

須坂高校生の95%以上が4年制大学を目指し、そのうち約75%が国公立志望です。個人戦全国大会は生易しいものではありません。

○そこで、相談です。どうすればいいか、皆さんの考えを聞かせてほしい。これこそ、よりよい社会づくりの練習です。

○私案を言います。「部活も、生徒会も2年の終わりで引退する。」どうでしょうか。これをたたき台にして、議論してください。議論の余地を生徒の皆さんに与えました。昨年も、クラスマッチを1日にすることについて、議論の余地を与えました。しかし、残念ながら「任せて決まった後にぶーたれる」生徒がいて、「引き受けて考えた」のは生徒会執行部たちと他数名でした。今度こそ、よりよい須坂高校づくりのために当事者として議論を重ね、代案を提出してほしいと願います。11月末までが議論のリミットです。

○議論の方法は新生徒会に任せます。今、校長が、生徒に議論の自由を与えました。この権利を放棄し、権利の上で爆睡していれば、自由を奪われ、よりよい社会は作れないことを思い知ることになるでしょう。自由について、立派な議論をしてきたこれまでの生徒会や、フリートークや新聞の投書で「自由」について立派に表現したある3年生のように、勇気をだして自分の意見を言ってほしいと思います。

○最後に・・・須坂高校は「大学のない町の大学のような高校」になればいいなと思っています。かつては、そういう自由闊達で知的で地域から必要とされているというプライドを持った大学のような高校でした。ここ2、3年の自由闊達に議論する生徒会活動のおかげで、今、また、そんな雰囲気になりつつあります。さらに、強くその色を取り戻せばいいと思っています。カッコよく言えば「未来志向型復古」です。校長は、理想ばかり言うと思う生徒もいるでしょうが、理想にこそ現実を変える力があります。

○ありたい自分という理想をもって3年生には頑張ってもらいたいし、1、2年生にカッコいい背中を見せ続けてほしいと願っています。応援しています。

長くなりましたが、以上がその時の原稿です。その後、生徒諸君は粘り強く議論を重ねてくれました。クラスでアンケートを取って、それをまとめた資料で議論をしたところもあります。同じクラス、同じ部活の中にも温度差や、考え方の相違があることが浮きぼりになった主体的探究的な価値のある資料でしたし、まとめた生徒の勇気と行動力は見事でした。新生徒会の言動も目を見張るものがあります。議論をより広くより深くするために全校集会やフリートークを開き、生徒総会や緊急臨時総会では、あえて「校長先生の提案に賛成する」という役を買ってでることで、多様な意見を掘り起こし、厚みのある話し合いにしよう工夫する等、自主自律を標榜する須坂高校生徒会の伝統をしっかりと引継いだたくましい姿を見せてもらいました。並行して60名ほどの生徒が校長室に直談判なり自分の考えを伝えに来てくれました。そういう部員たちを見ると「部活が人を育てている」と感じます。一方で、校長室に全く来ない部活もあり、真剣に議論していない部活もあるやに聞いています。残念ですがこれも社会の縮図です。校長室に来てくれた生徒には、「道楽」の意味をネットで調べてもらいました。「道楽の否定的な用法：趣味への熱中度が甚だしいがために自分の職業に支障をきたすようになってしまったり生活が自堕落になるもの・・・(ウィキペディア)」どうでしょう。「職業」を「学業」に置き換えてなお胸を張って「部活を道楽とは言わせない！」と言えるのか質しました。そもそも道楽とは「道を解して自ら楽しむ」(ウィキペディア)という人を巻き込まない節度あるたしなみであり、人生を豊かにするはずのものです。しかし、自制のきかない中では、学業に支障をきたし、

心身と頭脳の健全な成長の妨げになってしまいます。また、一番の問題点は、人を巻き込み、人の時間のまで奪い去ることにあります。大学に行くためにしっかり学習習慣をつけておきたい生徒、推薦入試に挑戦するため多様な経験をしておきたい生徒、ボランティア活動や会芸研修に参加してみたい生徒、家族との時間や自分の時間を大切にしたい、自分の研究研修を積みたい大人たちの時間を奪っているという一面を忘れてはなりません。今や「道楽」に成り下がるどころか人を巻き込む「害毒」に陥落していないか。立ち止まって考えてもらいました。因みに、新生徒会には、「害毒」という負の面を看過しない正義感と批判的独創的画期的かつ多面的感覚をもった鋭いところがあります。また、1年生も執行部に自主的に加わるなど本校の生徒会の進化は止まることを知りません。ついでに、私が、本校の生徒会活動を認めている理由を説明しておきます。一言で言うならば「本当に人が育っているから」です。生徒会やりんどう祭のレベルは県下随一だと私は思っています。正副生徒会長龍長祭長はじめ正副委員長、正副パート長、部活の正副部長等はリーダーとしての責任・重圧を背負います。時に、不特定多数の厳しい批判に曝され矢面に立ちます。一筋縄ではいかない組織の得体に触れ、眠れない、ご飯ものどを通らない艱難を経験します。意見の相違で戦いが起こります。何とかしなければならぬ責任者たちは厳しさの中で腹を括り、自分の弱さと強さを知り、人のつながりの本質を知って乗り越えていきます。ただ好きなことをやっているわけではない。「引き受けて考える」ところが人を成長させるのです。ですから、本校の生徒会経験者はグライダー人間ではなく「自分のエンジンを搭載した飛行機人間」になって飛翔していきますし、カッコいいと私は毎年3年生を見て感動してきました。これが理由で、生徒会活動も部活動も3年生までやってこそその成長の到達点があると、実は私は思っています。「3年の最後までやり切る」。そのためにも、学業との両立、更に他の活動にも参加できる自由と主体性、やめる自由までも保証した様々な価値観を承認できる持続可能な部活にせよと言っているのです。「来年度早々英語の4技能試験が始まる」ことをよりよい部活動づくり・学校づくりひいては社会づくりのために利用してもらいました。英語の4技能検定ばかりでなく記述式まで棚上げになりましたが、入試制度がどう変わろうとも、全国大会個人戦の世界では、目標を定めてコツコツ努力し続けた生徒が勝つという当たり前は全く変わりませんし、本校の根底に横たわる問題の本質（目標について、部活動では一所懸命努力するのに、全国大会個人戦という大学入試に関しては努力しない傾向があること。つまり、高みを目指して全力を尽くす姿勢が本当はついていないのではないかという疑問があること）は解決されたわけではありません。

さて、部活動の中で、限られた条件下で高みを目指して全力を尽くしている生徒の姿は潔く立派です。カッコいいと私は思います。部活は、「生徒にとって輝ける大切な居場所」ですし、そこで、かけがいのない「仲間」を作ります。だから、部活動をやるなど言っているのでは決してありませんし、むしろ応援しています。ただ、その在り方を考えなさいと言っているのです。脳内で「オキシトシン」という物質が働くことで共同意識が生まれることが最新の脳科学で分かっています。そのオキシトシンには功罪があります。「仲間意識を強め、危機に面した仲間を守り救う」という功の部分と、「仲間以外の者、仲間から抜け出そうとする者に対し同調圧力が働き排他的になり、厳しいサンクションを与える」という罪の部分とがあります。こうした裏の部分にネガティブ・エフェクトといいますが、部活動にはかようにネガティブ・エフェクトがあることを周囲の大人は冷徹に捉えておく必要があります。「指示命令を聞き、規律正しい人間になる」一方で「主体的な思考力、判断力、表現力を失う」。「内側でのコミュニケーション能力が育つ」一方で「外側では挨拶

もできない内弁慶になる」。「一つのことをとことん追求する」一方で「価値観や視野が狭窄する」等々。部活動が必ずしも汎用性のある力（人生どこでも役に立つ力）を育てるわけではないというのが現実です。大きいものでは、日大アメフト部の事件や、身近なものでは、顧問には挨拶するがそれ以外の先生には挨拶もできないというのがいい例でしょう。残念ながら運動部経験者による犯罪、スポーツ界のさまざまな不祥事やパワハラ、体罰等のニュースが運動部活万能主義に疑問を投げかけています。部活さえやっていたら根性が必ず身に着くとか、生きる上で重要だと言われる非認知能力（グリットと呼ばれるもの）のうち最も大事だと言われている「自制心」と「持続力」が必ず身に着くと切り切ることにはできません。身に着く人もいるし、そうでない人もいます。部活をやっていない人だって身に着けている人は沢山います。「もっと部活やりたいけれど、グッと我慢してやるべきことはやる」「もっとスマホやりたいけれどグッとこらえてやるべきことをやる」「練習試合もやりたいけれど、ここは冷静にオープンキャンパスに行く、模試を受ける」「合宿も大事だけれど、将来のために海外研修に行く」。これこそが自制心であり、目標に対する持続力です。また、友人のこうした気持ちを鷹揚に受け止めてあげられる部活こそ持続可能な集団、互いの価値観を相互承認できる「自由」ある集団です。部活動がもつネガティブ・エフェクトを極力回避するためにはどうすればよいか。やるべきこと（学習活動や生徒会活動）や他校や大学とのプロジェクトに参加するとか海外研修に飛び出すとか、哲学対話で多様な価値観に触れる等、若い脳神経の栄養と言われる良質の刺激と部活動をセットにすることが実効性のある対策です。部活動も良質の刺激の一つであることは間違いありません。そもそも部活動の本来の役割は学校生活に潤いを与える「点心（こころに触れるもの）」です。とても魅力的なものです。しかし、主食を食わず点心を食いすぎてやせ細った脳神経になってしまっただけでは元も子もありません。

ここで少し「自制心」と「持続力」について触れたいと思います。教育経済学者の中室牧子さんが、人生を左右する非認知能力として「自制心」と「持続力」を挙げています。自制心が人生を左右する理由は、社会的教育的実験として有名な「マシュマロ実験」を調べてみると分ります。もう一つの「持続力」についてですが、私の考え方は次のエピソードから読み取っていただければと思います。この一連の部活騒動の中で、部活動を2年で引退したいという生徒が何人も相談にきました。「このままでは両立は困難だから辞めたい。そう考える自分は根性がなく持続力がないのだろうか」と。私は、生徒たちにこう話しました。「持続力の定義は、『非常に遠い先にあるゴールに向けて、興味を失わず、努力し続けることができる気質』だと言われている。だから、将来こういう仕事をしたい、こういう人生を歩みたい、そのためにこういう大学に行く必要があると考えた上で部活をやめることは、逆説的な言い方だけれど、持続力の一環だ。自分の遠い目標に向かって部活をやめることが正しい選択であるならば、もはや続けることは根性でも持続力でも何でもない。自分を責めるのではなく、決断する勇気を持った自分をむしろ讃えるべきだ。」と。

さて、日本の子供たちは「読解力が弱くなっている」という結果がOECDの調査で分かってきました。本を読まない。新聞を読まない。勉強しない。そもそも忙しすぎてその時間がない。先生も同じ。なぜ？生徒にとっても先生にとっても部活動が一つの大きな原因になっているとテレビで紹介されていました。生徒のみならず部活動に苦しんでいる先生方は沢山います。家族を置き去りにして土日は部活。心身の休養も取れずに部活。授業の十分な準備もできずに部活。放課後生徒が質問に来て部活。大会出張で授業は自習など、先生にとって苦しい。これがそのまま多くの生徒にとっての不利益に直結しかねない実態

があります。また、本校には「先生になりたい」という生徒が結構多くいます。とてもうれしいことですが、その生徒たちが教師になった時、生徒とじっくり向き合える時間を大切にしたり（学習活動時間の回復）、自分や家族の豊かな時間を大切にできる（生活時間の回復）まともな職業にしておくことも私の責務だと感じています。今や教職は、志望者がどんどん減少している過労死ラインぎりぎりのブラック業種になっています。私たちは、可能性の塊である大事な若者を目の前にしています。部活動の功罪をしっかりと認知した上で、冷静かつ適切に時間配分をしてあげることが我々大人の責務です。文武両道というのならば一週間7日のうち部活は3.5日が当たり前です。百歩譲って4日で十分でしょう（この度姉妹協定を結んだ台湾羅東高級中学校は50分授業11時間だったそうです。あまりにやりすぎだということで1日8時間にしたそうです。それでも夜に3時間は塾に行くそうです。韓国や中国はさらにハードだと聞きます。そして、部活動がないのが一般的で、あっても週2時間程度だそうです。それも何だか極端で不健全だと思いましたが、本当に大学へ行きたい人間が、週7日のうち6日も部活動をし、疲れて家庭学習もせず、授業中寝てしまったり、どんどん勉強が分からなくなって心身の健康まで害してしまうなど、勉強と部活の両立に関し40%もの生徒が悩んでいるといった状況の方も同じくらい不健全です）。部活動で身に着けるべきは「限られた時間や空間のなかで高みを目指して全力を尽くす精神」ではないでしょうか。結果、上位大会に進出できればそんなにうれしいことはありません。また、たとえ一回戦で負けてしまっても、「限られた条件の中で全力を尽くす精神」が身につけているのであれば、これほど人生で生きる力（汎用性のある普遍的な力）はありません。

やや厳しい筆致になりましたが、実は今回の議論で真剣に考え始めた生徒諸君が沢山います。例えば、生徒会を中心に6回もの代議員会を開いて議論を深めてくれたこと、正副新聞委員長が校長インタビューによる特集号を発刊したことなど、よりよい学校づくりを目指すレベルの高いシティズンシップが萌芽しています。「自由」について哲学対話がそこかしこで自然発生的に行われる等々、他校にはまったくない本物の自主自立（律）が具現化されていることに明るい未来を感じるくらいの喜びを覚えます。1,2年生の中には、「校長に2年で引退だと言われ真剣に考えた。」「夏休み中に大学のオープンキャンパスに参加し、大学進学の意味を再確認できた。」「やっぱり大学に行きたいし、自分は不器用で両立できないので2年で引退する。」「勉強を始めたら時間が足りないことに気づいた。」等々。これはほんの一例ですが、人に言わずとも自分と真剣に向きあい将来を見据えて行動し始めている生徒が増えているという明るい兆しが様々なデータから読み取れます。また、自分の価値観や視野を広めるために高校内外の研修やプロジェクトに参加する生徒が須坂高校は際立って増えています。多チャンネルで脳神経を鍛え始めています。ネット社会の大きなデメリットの一つに「クラスター化」があると脳科学者の中野信子さんは言います。「他者の意見や価値観を受け入れられなくなる小さな集団化」という意味です。「炎上」「吊し上げ」が起きる原因です。社会学者の宮台真司さんも「多チャンネルの重要性」について、どちらかと言えばコミュニケーション能力に優れている女子はこれに陥る危険性を上手に回避しているが、男子は心して「多チャンネル」を経験していかないと狭窄した価値観で暗闇に陥りやすいというような内容を語っています。「それしかない人にとって、それが無くなったらすべて失う」という状況になりやすい。だから、若い時こそ多くを経験し、多様な価値観に触れることが大事です。ついですが、中野信子さんや養老孟さん茂木健一郎さんらの最新の脳科学的知見から学ぶことは沢山あるので読むことをお勧めします。例

えば、「人間の脳は、酸素をたくさん使うので効率からすれば考えるより命令される方を好む。疲れていると思考力判断力が鈍り、指示命令を欲しがると受け入れやすくなる」など人間の脳の性質を知ることができます。このような人間の脳の性質を悪用した勧誘や商法の横行、考えずに脊髄反射的にできるゲームに病的に熱中する中高生の増加、どんなに課題を与えても部活で疲れていると学力は定着しないという実態等が思い当たります・・・

さて、話をもとに戻しますが、実は、学問することそのものが「多チャンネル化」であり「脱クラスター化」の行為なのです。行きたい大学があるのならば目的のために勉強するのが当たり前ですが、もとより大学へ行くためだけに人は学問をするわけではありません。どういう進路であっても、世界を広げるために、より「自由」になるために、より「しあわせ」になるために学問をするのです。学問すること自体が、楽しいと思えるようになるには、それに費やす物理的時間と良質な刺激を意図的計画的に与え、習慣をつくるのが大事だと私は考えています。しかしながら、世界の中で、日本のこどもは学問を楽しんだり本を読んだりしていないと言われていています。特に、長野県のこどもは勉強しないと言われていています。なぜでしょうか。時間があれば、どうしてもスマホをいじったりゲームをしてしまうのは、自己管理能力が育っていないことと周囲の大人が始終そうしているからだそうです。大人の勉強時間について国が調べたデータによれば長野県はワースト5に入っていると遠藤守信信州大学特任教授が教えてくれました。ハッとさせられます。生徒諸君に私たち教師が本来の姿（新しいことを知ることを楽しみ、よりよい授業の研究と実践をする姿）を見せることがいかに必要か。それができる時間がいかに必要か考えさせられます。

今年も、3年生の推薦入試のための面接練習を校長室でも行いました。どの生徒と話しても、その利発さ聡明さとまだまだ伸びる可能性を実感します。部活騒動がきっかけで校長室に話に来てくれた1、2年生も同様です。須坂高校はとても独特で面白い高校です。これほど自由闊達でかつ自主自律している学校は稀有です。これは本当です。この可能性の塊たちを大事にしなければなりません。先日も、職員会で「生徒の主体性を育むために、部活動では、指示命令ではなく考えさせる部活、『脳みそに汗かく部活』をしてほしい」とお願いしたばかりです。日本のラグビーが強くなった最大の要因は「監督の指示命令・支配から選手を解放したこと。そのことで選手たちのコミュニケーション能力が格段にあがり、自分たちで判断する力が着いたからだ」とNHKの特集でも言っていました。「脳みそに汗かく部活」は、すぐに勝利には結びつかないかもしれませんが、それが何だというのでしょうか。「自ら思考し判断し表現する力」が身に着くこと以上に大事なことはありません。

この度みごと花園への切符を手にした飯田高校ラグビー部のモットーは「勉強第一」です。監督も長年外部コーチを務めた方も口癖は「早く帰って勉強しろ」だそうで、ラグビーで「効率」「集中」「切り替え」を身に付けさせてきたと言います。そういった自分たちのラグビーができたかを常に問い続けてきた結果の優勝だと。ラグビー部の普段の練習時間は2時間、テスト前はしっかり勉強と決めていると校長からも聞きました。凡事徹底を貫いた本物の文武両道です。持続可能な部活動の見本です。高校生に本当に必要なのは目先の勝ち負けではなく遠くのあるべき姿を目指すことでしょう。大船渡の監督同様、生徒の将来を考える指導者には頭が下がります。「どうせ勉強しないのだから休養日など作らないで部活動させてほしい」という大人とは雲泥の差です。

須坂高校は昔から毛色の違った進学校です。今も毅然としてそうあるべきです。「校長、



変わっているのはあなたですよ」と言われる方もいらっしゃるかもしれませんが、私はまっとうなことを言っているつもりです。須坂は他校とは違うかもしれませんが、そのうち他校も時代も須坂に追いつくようになるでしょう。須坂高校の生徒諸君は素直で利発で、特に最近では主体的だとよく言われます。「考えて主体的に行動できる須坂高校生だ」と私も思います。だから、何が正しいか、本当にそうなのか、本質は何かを考えられるちょっと生意気な須坂高校生でいつづけてほしいと思います。須坂は須坂。広い視野とプライドをもって将来なりたい自分とよりよい社会を主体的に追究してほしい。その基礎を作る高校3年間であってほしいと願います。

さて、いよいよ2学期終業式となりました。一度立ち止まって、自分をメタ認知し、再び将来に向けて歩き出す2度目の節目に、これまで書いてきた内容を織り交ぜながら、こんな話をしました。

<令和1年12月26日(木)2学期終業式にて>

○弓道部、吹奏楽部、卓球部、特に北信越大会で垂澤さんが準優勝しました。須坂高校は、長野県の中でも最も練習時間の短い高校です。にもかかわらず、ちゃんと結果を出したことを高く評価し讃えたいと思います。

○まずは、自習室のネーミング・コンテスト、多数の応募に感謝します。自習室の名前は「スタバ」に決定します。命名者は3年6組の寺澤心くんと、佐藤隼人くんです。(拍手)

須坂初のスタバが須坂高校内にあるというのも軽妙洒脱でいいかなと思います。常連が沢山出る自学自習の場になることを期待しています。

また、つぎに根強い人気のあった「龍学館」もなかなか捨てがたいいいネーミングでした。これは、1年4組の村田紘基くんの作品です。こちらは伝統を重んじた重厚なネーミングでした。どこかで使わせてもらう機会があればと思っています。その際には、看板に名前を刻み、副賞をあげたいと思います。

表彰は校長室で行いますので「スタバ」の命名者2名は校長室に来てください。

○さて、部活動の在り方についてこの終業式で一応の決着をつけたいと思います。

こうした問題を考える際に「深く・広く・遠く」考える癖を身に付けてほしいと思います。「深く」は、自分だけを中心に置いて、自分はどうしたいのか、本当に大学に行きたいのか、将来どうしたいのか、そのうえで、自分にとって部活を含めた高校生活はどう過ごすべきなのか深く考え、自分と対話することです。「深く」自分と対話したら、次は「広く」周囲の人について考えます。「部活動を制限したって、勉強をやらない人はやらないし、部活をどんどんやっても勉強をやる人はやるのだから、制限することは無意味だ」という意見について、皆さんはどう考えるでしょうか。部活動は自分だけの場所ではないという当たり前のことにもう一度目を向けてみてください。「広く」考えてみてください。「部活もやりたいし、大学にも行きたい。」殆どの生徒が同じです。その一方で、体力とか睡眠時間とか自分らしいペースとか、または、経済的なこととか自分の目標とする大学とか・・・それぞれがみんな違います。「部活動も大好き。この友達たちや先輩・後輩も大好きだ」でも、「大学進学のために日曜日くらいはしっかりと勉強して不安を解消しておきたい。」「塾に行きたい。」「体力的にも生活のみんなと同じではないから、ゆっくり休みたい」「本を読みたい」「オープンキャンパスにも行きたい」「家が遠いから、朝練は無理。」「夜遅くまで

勉強しているので朝はゆっくりしたい」「高校生の様々なプロジェクトに参加してみたい」「ボランティア活動もしたい」「海外研修など多様な経験もしてみたい」「生徒会活動やりんどう祭にもしっかり関わりたい」「お金や時間のことで親にあまり負担を掛けたくない」等、自分も含めて様々な思いや環境を持った無限の可能性ある人たちの集まりであるということにもう一度目を向けてみることです。時間を度外視した部活動は、部活だけをやりたい生徒にとってはいいかもしれませんが、そうではない生徒たちにとってどんどん負担になっていきます。特に、「あの大学に行きたい」「将来はこういう道に進みたい」という希望を達成できる部活動になっているかどうかは進学校にとって重要な問題です。沈みかける船からは人が離れていきます。自分のオールで自分の船を漕いでどんどん離れていきます。部活も同様です。「このままこの部活をやっていたら行きたい大学には行けない」となれば、真剣に将来を考えている生徒たちが、その部活から離れるのは当然です。その部活にいたら大学に行けなくなるというのは、希望のない船に巻き込まれて沈んでいく大惨事と同じです。

では、「やりたい人もいるのだから、いちいち部活の時間を規制しなくとも、練習試合の日に模試やオープンキャンパスに参加するのも、引退も、個人の自由を保障した部活にすればいいじゃないか。自己管理は自己責任じゃないか。」という考え方はどうでしょうか。これは一見合理的で本質的に見える意見ですが、どう思いますか。それができれば本物の自主自律であり、理想だと私も思います。しかし、ほんとうにそんな自由な部活を作れるのか？自己管理がしっかりできる強い人なんているのでしょうか？

社会学者・菅野仁さんの「友だち幻想」という本があります。自主自律・自由闊達を伝統とする須坂高校生には是非とも読んでほしい本です。そこには、「同調圧力」「ネオ共同性」によって日本の若者は苦しめられているというようなことが書かれています。例えば「メールが来たら即レスポンスしなければならない」という強迫観念などです。さきほども言いましたが、部活動は一人ではできません。必ず集団ですし、互いに巻き込み、巻き込まれながら活動するという宿命があります。そこには、そんな自由はありません。集団の中であって個人の自由や平等を守ってくれるものは何だと思いませんか。それは、「ルール」です。「友だち幻想」にはこの原理原則が実に的確にわかりやすく書かれています。こうした社会科学の本もぜひ読んでほしいと思います。視野や見える世界が広がるからです。さて、みんなそれぞれにペースがあり行きたい大学も将来やりたいことも違います。ただ、進学校には、進学するためにコツコツと勉強し、本を読み、推薦入試のためにも多様な経験しておく必要があるという共通の課題があります。だから、「同調圧力」や「ネオ共同性」の呪縛から個人を解放し、そうした公共性と個人の自由を守るためには「ルール」が必要なのです。「ルールが自由を守る」とは一見矛盾した言い方ですが、これこそ人間社会の本質です。今年はラグビーを見る機会がとて多かったので、調べてみました。イギリス発生のスポーツマンシップとは「徹底した規律・ルールのなかで、目的達成のためにより自由により平等に活動してみせる精神」だということ、そして、そのスポーツ精神をもっと具現化したのがイギリス人が誇るラグビーなのだということが分かりました。

部活は大事だと思います。ただ、ルールのない、時間を度外視した部活動のあり方は、様々な矛盾や負の影響を生み、今や、看過できないところまで来ています。信毎の「闇部活」の記事にも出てきますが、「うちの息子は部活動のおかげで生き生きしている。もっとやらせてあげたい。」という言葉には、時間を度外視した部活のせいで、勉強や読書や多様な経験ができなくなったり、その結果、勉強がストレスになったり、その結果、部活がス

トレスになったり、家族との時間が無くなったり、休養がなくて心身の健康を害したり・さまざまな弊害を被った生徒や保護者、先生たちがいることなど考えたこともない放縦さがよく表れています。大事な目標があるのに、大事な自分の生活やペースがあるのに、それが遠のいて苦しんでいる生徒および保護者、更には先生方も、声の大きい人や強い人が作り出す「同調圧力」「ネオ共同性」に押しつぶされ、黙って耐え忍んでいるのです。もともと部活が好きだった生徒までもが苦しんでいるという有様です。皮肉な結果ですが、時間を度外視した部活動は、いずれ消えていきます。部活をやりながら、充実した高校生活を送りたいと思っている生徒の希望を奪いますし、そういう部活をやっている高校には中学生も入りたがりません。過剰な部活動によって勉強第一でなくなった進学校は進学校ではなくなります。そうなれば、今後、君たちのような優秀な生徒は須坂に来なくなります。君たちが大学を卒業し、振り返ってみたら須坂高校は地域には必要なくなっていたということにならないよう、伝統の一つである「進学校」の看板は守らなければなりません。そこまで考えなくとも、少なくとも、今さえよければいいのではなく、自分の遠い将来の目標を考えた上での「今」を考えることが大事です。未来という観念は人間にしかないのですから。このように、将来の在りたい自分の姿や学校の伝統を考えることを「遠く」考えると言います。いろいろな考え方がある、それらを認め合ったうえで、よりよい部活動、持続可能な部活動にするにはどうすればいいか。自主自律を重んじる伝統を持つ須坂高校生は、「任せてぶーたれる人間」ではなく「引き受けて考える」人間であるはずだと信じ、高校生活の主体、当事者として真剣に考えてもらうための「2年で引退案」でした。

さて、昨日、生徒会3役が私に生徒たちの原案を提出してくれました。生徒会が何度も議論を重ね作り上げたために、今回は多くの生徒が「任せてぶーたれる人間」ではなく「引き受けて深く考えられる人」になったと思います。その案は以下の通りです。

- 1) クラブ活動は3年次のインターハイや夏のコンクールまでとする。進学等に関係し、その後の大会等に参加しなければならない場合はその限りではない。
- 2) 長野県教育委員会に提出した「運動部活動方針」や今後策定されるであろう「文化部活動方針」を遵守する。
- 3) 須坂高校生の本文は学習であることを再確認するとともに、クラブ・生徒会活動を理由に学習に怠惰であることを正当化しない。
- 4) 生徒会活動は「生徒会規約」通りに任期を9月30日までとするが、引継ぎの時期を早めるなどの工夫を進める。

付記)・「運動部活動方針」「文化部活動方針」が遵守されているか確認する。

- ・ 部長会を招集し、必要な事項の調整や話し合いを進める。
- ・ 生徒会主催の勉強会を開く（例えば木曜日）。
- ・ 各部の活動計画の確認をする。

以上です。これを作り上げるにあたり、「持続可能」という観点を大事にしたと聞きました。今の3年生徒会が打ち立てた「凡事徹底」とともに精神性と先見性のある見事な方針を打ち立ててくれたと思います。私は、このために臨時生徒総会やフリートークや6回もの代議員会を開いて議論してきたこれまでの生徒会や各部や生徒個人の動きを尊

敬するとともに、出してくれたルールを尊重し、部活動の在り方を以下のように決着をつけたいと思います。

- 1 部活動の入退部は個人の自由であるが、3年まで行うことを認める。
- 2 上位目標を第一とし、だれもが持続可能な部活動とするために平成31年4月に県教育委員会に提出した方針を遵守する。(月曜日は例外なく休養日とし、大会等特別な理由がない限り、土日のどちらかは休養日とする。やる際は、1日3時間程度を上限とする。テスト前一週間は職員会で認められない限り部活動はやらない。)
- 3 4, 5, 6月の多忙な時期に備え、学力という基礎体力を着け、また、価値観や視野を広げるための多様な経験を積むために、1, 2, 3月の木曜日はどのクラブも例外なく休養日とする。

以上、このような話をしました。

部活動は生徒にとって「輝ける」大切な場所です。それを生徒から奪うつもりはサラサラありません。それぞれの上位目標を第一とし、ルールを守る中で、全力を尽くす「本物のスポーツマン精神」「本物の文武両道」を具現化してくれることを願います。4、5、6月に備えて、木曜日は自学自習の時間や休息の時間、先生方のゼミや補習や読書や様々な経験を積む時間、自分を磨く時間に使ってください。そして、自分の中にある「可能性の塊」をもっともっと太らせてください。

最後になりましたが、3年生の力がどんどんついてきていると先生方から聞いています。全国の受験生には平等に時間が与えられています。限られた時間や条件の中で全力を尽くし、自分の道を掴みとってほしいと願っています。これまで伝統を守りつつすばらしい須坂高校を作ってきた君たちなら必ずこの山を乗り越えられると思っています。全職員とともに中庭の「希望」も応援しています。